



国立大学法人  
豊橋技術科学大学

# IT食農だより

発行元：豊橋技術科学大学 先端農業・バイオリサーチセンター

住所：〒441-8580 愛知県豊橋市天伯町雲雀ヶ丘1-1

TEL：0532-44-6655 FAX：0532-81-5108 E-mail：manager@recab.tut.ac.jp

2022年8月15日

No. 87

## 課題研究計画検討会を実施

7月9日（土）午前、課題研究計画検討会を実施しました。植物工場マネージャー10期生7名、IT食農先導士（土地利用型）6期生1名が参加しました。受講生は1人1研究課題を設定し、「なぜその研究に取り組むのか」、「研究の目的」、「実験方法」、「予想される結果」等を報告しました。報告の後には、質疑応答時間が設けられ、先生方、他受講生からの質問に緊張気味に答える姿などもみられました。4月から研究の準備をし、順調に進んでいる受講生、まだ計画段階の受講生と課題研究の進捗状況は様々ですが、来年2月の発表会に向けて本格的に研究がスタートしました。（文責：前田紀子）

## 第3回 先端施設研修・先端IT農業研修



計画検討会の後、引き続き午後には研修が実施され、（公財）功農支援会のトマト栽培現場を視察しました。支援会の概要、就農支援の取り組み等について説明を受けた後、実際の栽培状況を視察しました。各ハウスでそれぞれの特徴等を伺った後、最後にミニトマトの食べ比べをし、糖度の違いについて実感する場面もありました。天候にも恵まれましたが、受講生からは、都度、熱心な質問がありました。（文責：前田紀子）

## 高山弘太郎 新センター長

ご挨拶



2022年4月にセンター長を拝命いたしました。本センターの社会貢献機能をより一層高めるために全力を尽くしたいと考えております。よろしくお願ひ申し上げます。

先端農業・バイオリサーチセンターは、2006年の本学開学30周年記念事業の一環としての開設以降、平石明先生、菊池洋先生、井上隆信先生、そして、浴俊彦先生といった本学の農工連携教育研究をリードする先生方をセンター長に戴き、農業生産から食卓までをスコープにいたれた先端的食農技術のためのリカレント教育と持続可能な食料生産に貢献する次世代型先端農業技術の研究開発および関連する食農・バイオ・センサー・計測・制御・情報・環境などの多様な分野の高度な技術開発に取り組んで参りましたが、この素晴らしい歴史を引き継ぎつつ、さらに、AI・ロボット・デジタルなどの新技術を積極的に取り込んで、SDGs・カーボンニュートラルといった世界的な社会課題の解決にも寄与する人材育成と研究開発を推進して参りたいと考えています。

具体的には、①現行の人材育成教育プログラム（最先端植物工場マネージャー育成プログラム、IT食農先導士養成プログラム「最先端土地利用型IT農業コース」、東海地域の6次産業化推進人材育成、実践的キク栽培論・実践的トマト栽培論、市民講座）のリアインと②産学連携・地域連携を前提とした研究開発機能の強化を行います。①につきましては、従来のプログラムに、AI・ロボット・デジタルなどの新技術やSDGs・カーボンニュートラルなどの社会課題に関連するコンテンツをフレキシブルに追加する仕組みを整備し、過去に本プログラムを受講頂いた方々を含めて、受講生の皆様に継続的に価値を提供いたします。また、②につきましては、これまでの本センター専任の特任教員と本学の全ての学系（1系 機械工学、2系 電気・電子情報工学、3系 情報・知能工学、4系 応用化学・生命工学、5系 建築・都市システム学）から参画頂いている兼任教員で構成する研究コア（センサ・センサシステム、バイオ、農環境、スマートアグリテックシティ、農業）を中心とした活動を基盤として、国・県・市などの施策と連動した先端的技術開発、食農関連産業やアグリテック関連産業との共同研究、東三河地域の食文化の発展に貢献する様々な技術開発を強力に推進します。なお、これらの研究開発に、IT農業ネットワークを構成する人材育成プログラムの修了生約600名の皆様にも、研究協力者や評価者といった多様な皆様のご参画をいただくことで、本センターの強みを生かした社会実装を前提とした研究開

発が可能になると期待しています。本センターは、地域の自治体や多くの団体・法人の皆様にご支援頂いており、ここにあらためて深い感謝を申し上げますとともに、上述いたしました本センターの活動が地域の発展に貢献し、さらには、わが国全体の農業の先進化に貢献できるように努めてまいりますので、引き続き皆様のご支援を賜りますよう、よろしくお願い致します。

## ものづくり博

### 2022 in 東三河

先端農業・バイオリサーチセンターは、6月17日(金)、18日(土)に豊橋市総合体育館で開催された「ものづくり博2022 in 東三河」(主催：東三河広域経済連合会)に出展し、多くの方にお越しいただきました。本展示会は、次世代の若者たちに向けて、東三河の「ものづくり」を伝えるため、小中高生に向けた展示やイベントも数多く展開し、東三河の専門高校や理工系大学のものづくりも紹介するものです。「先端農業・バイオリサーチセンターIT農業コアで行っている人材育成事業」スマートアグリで、ひとづくり、まちづくりをテーマに、人材育成事業の紹介、人材育成講座の修了生の方達が開発した農産加工品(6次産業化商品)を展示しました。特に、修了生らの農産加工品に注目が集まり、人材育成講座のアプリにもなりました。(文責：山内高弘)



ものづくり博での展示風景

## 季節の花 ノウゼンカズラ

ノウゼンカズラ(学名: *Campsis grandiflora*)は、ノウゼンカズラ科ノウゼンカズラ属で、中国原産の落葉性つる性植物です。常緑低木。蔓を樹木や壁に這わせて生長し7〜8月に橙色の花を咲かせます。とても華やかで樹勢が強く丈夫な花木です。日本へは平安時代に渡来し、渡ってきた当時の古名は「ノウセウ」や「ノウゼン」と呼ばれ、のちに訛り「ノウゼン」となりました。

ノウゼンカズラは、日当たりのよい場所で栽培します。日陰では、花が咲きにくく、蕾ができて落ちています。土質は特に選びませんが、粘土質など極端に水はけの悪い場所は避けます。

植えつけは3月中旬から4月中旬に行います。植え穴に、掘り上げた土の1/3程度の堆肥や腐葉土を混合します。つる植物なので、這い登るためのしっかりと支柱や樹木、柵、フェンスなどの近くに植えることが必要です。また、つるは東や南の明るい方向に伸びていくので、伸びる方向を考え

て、植え場所を選びましょう。また、この花は、挿し木で簡単にふやすことができます。葉を2〜3枚つけた気根が出ている枝を切ってさせば、簡単に発根します。ある程度の高さに育つまでは、幹の途中から出る枝を剪定し、つるを数本まとめ誘引します。その後、おう盛につるを伸ばすので、伸びすぎた枝は剪定しましょう。剪定の時期は2月下旬から3月です。

植えつけからしばらくの間は、土が乾いたら水を与えますが、その後は必要ありません。鉢植えでは、土の表面が乾いたら水やりします。庭植え、鉢植えともに、寒肥を2月、さらに、4月から5月に緩効性化成肥料や油かすを施します。(文責：山内高弘)



ノウゼンカズラの花

## 旬の食べ物 シシトウガラシ

### (トウガラシ甘味種)

学名: *Capiscum annuum L. var. angulosum*

英名: Sweet pepper

シシトウガラシはナス科トウガラシ属に分類されるトウガラシの変種、または栽培種の中で辛みが少な



シシトウガラシ

い品種群の総称です。熱帯では多年草ですが、日本では一年草です。一般的に、辛味があり香辛料として使われる小果種をトウガラシ(辛味種)、甘味があり果肉が薄い中果種をピーマン、果肉が厚い大果種をパプリカ、辛味のない小果種をシシトウガラシとして区別されますが、植物分類上はシシトウガラシとピーマン、パプリカは同じ種とされています。シシトウガラシの代表的な品種に「獅子唐」や「甘長とうがらし」、「京都の伝統野菜になっている「万願寺とうがらし」などがあります。私たちがスーパーなどで購入するシシトウガラシは普通あまり辛くないですが、なかには唐辛子のように辛味が強いものがまぎれていたりします。乾燥など強いストレス下で生育すると辛くなると言われています。シシトウガラシの旬は夏です。今年、大学の畑ほ場でも栽培していますが、病害虫に強く比較的簡単に栽培できます。夏の食卓を彩る野菜の一つにシシトウガラシはいかがでしょうか。(文責：熊崎忠)